

文部科学大臣賞

“愛”の中で生きる

秋田県 横手市立平鹿中学校 二学年

藤田 真理子

朝、眠い目をこすり階段を下りて行くと、もう祖母が台所に立っている。「おはよう。」

煮干したつぷりのみそ汁を作る元気な祖母。朝の見慣れた風景だ。しばらくして朝食作りに母も加わり、慌ただしい朝の時間が始まる。

「みそ汁だけは飲んで行け。」

これが祖母の口癖。煮干したつぷりのみそ汁をおわんによそい、私に差し出してくれる。

祖母は今年で八十三歳。忙しい母に代わって我が家の食事のほとんどを切り盛りしている。実際の年齢より少し若く見える祖母は私にとっても、頼りになる存在だ。

ところが、そんな祖母が二年前乳ガンになり、手術をすることになった。それはまさに、我が家にとって衝撃的なことだった。幸いガンは初期の段階で、手術後は投薬をして経過を見ることになった。しかし、その薬は骨をもろくする副作用があるらしく、骨が丈夫でないと使えない。検査の結果、祖母の骨密度は良好で、薬を服用することができたのだった。みそ汁を口に運びながら、「おばあちゃん、骨丈夫でよかったね。」

と言うと、

「本当だ。感謝している。何でもちゃんとしておくもんだ。」

と返ってきた。

祖母はこれまで三度入院をしてきている。その都度、大切なものを再確認するのだそうだ。

「健康は大切だな。気持ちもしっかり強くなくちゃならない。もちろんお金も必要だ。入院費もちゃんと準備できるようにしておかなくちゃ。」

そうだ、入院費……。三度の入院では、その費用もばかにならなかったにちがいない。

「入院費、たくさんかかったんじゃない。大丈夫だった？」

と聞くと、

「ばあちゃんはな、生命保険に入っていたから、入院費が安くてすんだんだよ。」

「生命保険？」

私は、生命保険について全く知らなかった。それから、生命保険について家族

に聞いて調べてみた。

生命保険とは、「もしも」の時に、家族にかかる負担を減らすためにある。入院費が少なくすんだのも、保険があったからだ。祖母は入院して改めて、生命保険のありがたさを知ったそうだ。健康な時に保険料を支払う。それは、将来のために支払っているのだ。保険、それはいわば自分の未来を守ってくれるお守りのようなものだと思った。

ところで、家族に保険のことについて聞くと、必ず返って来る言葉があった。それは、

「将来、真理子が困らないように、生命保険に入っているんだよ。」

という言葉。私のために、家族は以前から生命保険に入っていたらしい。

「私たちに、もしものことがあっても、真理子が安心して進学できるようにね……。」

家族みんなが私のことを思って保険に加入してくれている。私が行きたい学校に進学し、安心した生活を送れるようにと願って……。

全く知らなかった。普段気付かなかった家族の私への思いを知ると、急にあつたかい感謝の気持ちが胸にこみ上げ、泣きそうになった。

保険は、「家族への愛情のかたち」なのだと思う。家族の将来を考えているからこそ、みんな、生命保険に入る。自分の幸せと、自分以上に大事な誰かの幸せを願って……。私はまだ自分の将来が見えていない。しかし、そんな家族の愛情に応えるためにも、しっかりした人生を生きていきたい。

「家族への愛情のかたち」それは、祖母の作るみそ汁と似ている。祖母はどんなに忙しくしても、毎朝欠かさず家族みんなの健康を考えて、煮干したつぶり、野菜たつぶりのみそ汁を作ってくれる。それは自分のためでもあるけれど、何より一番は家族のためなのではないだろうか。家族がこれからも元気に暮らせるようにと、祖母は今朝も煮干したつぶり、野菜たつぶりのみそ汁を作る。

「みそ汁だけは飲んで行け。」

祖母の作るみそ汁と生命保険には、目には見えない祖母の愛情がたつぶり入っていた。